
アース・ウィンド&ファイアーズ

あずまや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アース・ウインド&ファイヤーズ

【Zコード】

Z0945G

【作者名】

あずまや

【あらすじ】

ヤンkeesが三十回目の王座に輝いた次のシーズン、突如として空に現れた宇宙人たちに、地球はなすすべもなく支配されようとしていた。宇宙人は母星を汚す愚かな地球人を排除しようとしたが、優れた自分たちと同じスポーツを生み出したことに望みをかけ、野球で勝つたら今回は見逃してやろうと言い渡す。三ヶ月後のプレイボール直後、スタジアムの人々が目にしたのは、三振しないことで有名な一番バッターの哀れな姿だった。一方、先発を任せられた俺は、運も味方して怪物たちを無失点に抑え、スコアボードに『0』が並

んだまも、試合は終盤を迎へる……。

九回裏ノーアウト満塁、スコアは一対〇。
地球は絶体絶命のピンチに追いこまれていた。

「ハアハア……」

マウンドの俺は頬をつたう汗をぬぐつた。
あとアウト三つ。三つなんだ。

スコアボードにあと一つ『〇』を加えることができたら、俺は

……。

粉袋ロジンパックを手放し、キャッチャー・ミットを睨み、大きく振りかぶつた。
「今日で野球をやめてもいい！」

* * *

それはヤンキースがちょうど三回戦のワールドチャンピオンに輝いた次のシーズンのことだった。

ニューヨークの上空に突如として巨大な円柱が現れた。いつたい何事かとテレビカメラが向けられたとき、世界中のチャンネルが一つしか使えなくなつた。

青い顔の男は画面の中で言った。

『この惑星は今日から我々が支配することになつた。抵抗しても無駄だ』

次の瞬間、ホワイトハウスと国防総省ペンタゴンが跡形もなく消え去つた。ニュースを知った人々が大恐慌に陥るなか、欧米、アジア、アフリカ、オーストラリア、と大陸の空は無数の円柱で埋めつくされていつた。人々は天を仰いだ。これでもう人類はおしまいだと。

襲来から数日がたち、宇宙人は再び放送をジャックした。

『おまえたちのことは調べさせてもらつた。ことによつては植民地にしてやつてもよいと思ったのだが、やはりダメだな。我々がやつ

てくるのがあと何年か遅れていたら、この惑星は次の一億年を迎える前に生物が住めない場所になる運命だつた。宇宙からの視点を手に入れてもなおこの汚染を食い止められないとは、まったくあきれ言葉にならん。ホモサピエンスにとってゴキブリは害虫だそうだが、この惑星にとつてのゴキブリは、おまえたちなのだよ』

地球人は返す言葉がなかつた。わかつていたことなのにどうして環境破壊を食いとめられなかつたのかと、この期におよんでも醜い言い争いが飛び交つた。

宇宙人はつづけた。

『だが……出来そこないのサルの惑星にしては、一つだけ驚いたことがある。野球だ。おまえたちは優れた進化をつづける我々と同じスポーツを生みだした。ということは、いずれ地球人も我々のような尊い存在になつていく可能性も、ないとは言い切れぬ。そこでだ。おまえたちに一度だけチャンスを与えることにした』

野球で一回勝負。勝つことができたら今回は見逃してやろう、と宇宙人は約束した。試合は三ヶ月後、開催地は『新東京ドーム』と指定があつた。

さつそく世界中からメンバーが集められた。チーム名は公募で『ウインド&ファイヤーズ』と決まり、ユニフォームが揃うと、関東の山奥で合宿がはじまつた。

宇宙人の試合のビデオなどあるはずもなく、選手たちはチームに貢献できるよう自分の技や仲間との連携を磨いていくだけだつた。合宿は淡々と進んでいった。少なくとも見た目は。

そして、ついに試合の日がやってきた。

新東京ドームは静まりかえつていた。人類の命運をかけた一戦に、人々はただ固唾をのむばかりで、応援のことなど忘れてしまつていた。この試合に負ければ我々は殺される。何十万年と地上を支配してきた人類が、わずか何十秒で。

一回表、宇宙人が投げた第一球。それですべてが決まつたような

ものだつた。

ウインド&ファイヤーズの先頭打者、ジャッキー・ブルースは三振しないことによく知られていた。男はバットをヌンチャクのようにな自在に扱い、どんな球でも当てることができた。そのジャッキーがなんと、ボールがミットにおさまつてからバットを振りはじめたのだ。

内野席から沈んだ声がぽつぽつとあがつた。

「終わったな」「ああ、終わった」

地球勢の攻撃はわずか九球でチエンジとなつた。

一回裏、俺はなつかしのマウンドに立つた。

小学中学とこの地で優勝投手になつた俺は全米のスカウトに勧められ、海を渡つて本場の高校に入つた。それから十年、俺は世界一の右腕と呼ばれる男になつた。付いたあだ名は『タイ・リー』または『心臓にトゲの生えた男』。

三勝三敗で最後の一戦を迎えた三年前のワールドシリーズ。第七戦の先発が決まつてゐるといふのに、十一時間も爆睡してその日の練習に遅刻した。

そんな俺の両足が、震えでとまらない。

八十億の希望を一手に引き受けたといふプレッシャー。ないと言えば嘘になる。だが俺にとつては、明日から野球ができないとしたら……という不安のほうが多くを占めていた。

審判の声がかかつた。

俺は振りかぶり、第一球を放つた。いい感触だ。ストライク一つもらつた。

青い顔の大男はすうつとバットを出す。

チツ、当てられた。打球は？

打球は彼方の夜空に消えていった。今宵は満天の星空、ならぬ無数の宇宙船ほしふねがきらめいていて、開閉式ドームは大きく口を開けていた。

ギリギリファール。

マウンドが汗の雲で黒ずんでいく。
終わった……かもしれない。

味方や俺自身の暗い気分とは裏腹に、それから宇宙人たちは凡打を重ね、気がつけば無失点のまま三回の攻防が終わっていた。ヒットは四番の一本だけ。それもバックスクリーン上空に一直線の当たりだったはずが、球場の明かりにつられてやつてきたカラスにぶち当たつて、ボールは外野手のグラブに收まり、ルール上、二塁打に終わった（そんなルールがあったこと自体、驚きだが）。

四回、五回、六回と似たような展開がつづいた。宇宙人は相変わらず四番だけは野手の間を抜ける当たりを飛ばしていて、エラーで出た一塁ランナーをホームに返し、ついに均衡崩れたかと思いきや、ランナーが三塁をまわったところですっ転んでタッチアウト。それに対し、地球勢は相変わらず三振の山だった。

運も味方してここまでどうにかヒット一本に抑えていよいよ見えるが、実のところは薄氷をふむ思いの連続だつた。メジャー屈指の名手とうたわれた二遊間がエラーばかりするのだ。明らかに集中力に欠けていた。それは合宿のときから皆がひそかに怖っていたことだった。

そして七回の裏、ついに事件はおこつた。

ワンアウト一塁、打者の当たりは真正面のショートゴロ。
ダブルプレーもつた！ 俺はマウンドで小躍りした。
ところが、内野からボールが帰つてくると、ワンアウト一二塁の大ピンチ。俺は我が目を疑つた。ショートが放つた球を、なんとセカンドが『受け取らなかつた』のだ！

野球はじまって以来の珍事に、超満員のスタンドはどよめいた。罵声や励ましの声はなかつた。いつたいあそこで何がおきたというのか。人々の思考はショックのあまりひどく滞つてゐるようだつた。

俺はつづくバッター一人を特大の外野フライでしのぐと、絶え間なく首筋をつたう汗のことなど忘れて、ベンチにどかっと腰を下ろした。

「あいつらめ……」

二十二人目の地球人打者が青い顔の怪物にもてあそばれている頃、ベンチの端では汚い罵りあいが燐つっていた。ショートのバルカンとセカンドのカラシニコフだ。

口論の中身は合宿のときから変わつていなかつた。宇宙人がやつてくる直前まで、彼らの祖国は互いに戦争をしていたのだ。

「俺様は千歩譲つて、てめえの腐れグラブに投げてやつたんだ」とバルカン。

「貴様の汚けがれた球を捕るくらいなら、死んだほうがマシだ」とカラシニコフ。

「死ぬのはてめえ一人で充分だ。肥だめ野郎！」

「やるか！ 馬糞野郎！」

俺はむくと立ち上がると、あえて耳障りなほうへ歩んでいった。男どもは止めるな言わんばかりに、こちらを睨みつける。

俺はダグアウト前を指し、低く言った。

「ベンチワークの邪魔だ。やるならそこでやれよ」

男たちはグラウンドに出た。一瞬、声を荒げたものの、逃げるようにな歸つてくると、主人に怒鳴られた双子の飼い犬のように頭をたれた。

「今まで生きてきて、これほど恥ずかしい思いをしたことはねえ」とバルカン。

「まったくだ」とカラシニコフ。

二十三人目の男が三振した。

俺はグラブを取りにベンチの『指定席』へ足を向ける。選手たちは尊敬のまなざしで俺を見送つた。

「いったいどんな魔法を使つたんだ？」

俺は天井を指した。

「ああ」

男たちは納得した。

二十四人目が三振し、スコアボードの上半分に八つ目の『0』が点ると、ベンチ上の内野席に招かれた子供たちから悲鳴があがつた。黒い顔、白い顔、黄色い顔。球場に集まつたすべての人々は今日という日に限り、西や東やあの神その神のことを忘れ、ただ一つのことのために声を合わせている。プレイボールのときからそれを見てきた俺は今、妙な考えにとりつかれようとしていた。

試合がこのまま永久につづいてくれたらいいのに……なんてな。

八回の裏も宇宙人は凡打をくり返した。思うようにいかず苛立つているのか、各打者は帰りぎわに不満を口にするよつになつた。

一人目。「ちゃんと投げるや

ちゃんと投げるだろうが。勝負を避けたことは一度もない。

二人目。「ケツ、待ちきれねえ」

何をだ。スロー・カーブなんか投げてねえ。

三人目。「遅すぎて逆に合わないとは、恐れ入つたぜ」

速球投手の最高栄誉『ロケット賞』を五年連続で獲つた、この俺の球が遅すぎるだと? 確かに相手のピッチャーは信じがたいほどの豪腕だが、あんなのは稀だと思っていた。俺の球威は奴らにとつて平均あたりで、投球フォームのせいでタイミングが合わないのだと思つていた。まさか、そつちのほうだったとはな!

マウンドを降りた俺は、ベンチとグラウンドをしきる金網に向かつてグラブを投げつけた。屈辱以外のなにものでもなかつた。もう一度マウンドに上がるぐらいなら、死んだほつがマシだ。

ふらふらとベンチに入ろうとする俺の頭を、厳つい手がガシとつかんだ。

「少しは数字を信用しろよ」

バルカンは『0』の数が十六になつたスコアボードを指すと、さつさとベンチに消えてしまった。

今度はしなやかな手が肩を包んだ。

「見ているぞ」

カラシニコフにかられて顔を上げると、色とりどりの幼い瞳が俺に釘づけだった。

俺は小さく笑うと、野球帽をひょいと持ち上げ、グラブを拾いに走った。

黄色い歓声があがつた。

あと一回。やるべき事をやるだけだ。あのクソ遅い速球で。

九回表、ウインド&ファイヤーズはベンチ前で円陣を組んだ。俺のアイデアだった。むさ苦しい顔を突きあわせて作戦を確かめた後、誰かが次の『世界野球』のときに真似してもいいかと訊いた。俺はイエスと答えた。

二十五人目のバッターは七番のバルカン。完全試合をつづける青の怪物が豪腕をうならせると、バルカンはバットをすっと横に寝かせた。

怪物はどすゞとマウンドを駆けおり、『口口に備える。

打球はぼーんと投手の頭上にあがつた。

「クソ！」

バルカンは歯がみしながら一塁へ走った。

白いラインの先、ファーストの男はなぜかミットをかまえている。走者はヘルメットを飛ばしてベースを駆けぬけた。

「セーフ！」

背のたけハフティーの墨審が両手を広げた。

「え？」

背番号『23』が大きな田でふり返る。

怪物は尻もちをついていた。地球の慣性にまだ慣れきつていなかつたようだ。

やんやの歓声。

ついにランナーを出した！

八番はカラシニコフ。ポストシーズンで四度もMVPを獲つた、当代最高の『クラッチ』ヒッターだ。『勝利の鍵番』と呼ばれたこの男に送りバントをさせるなど、当人はともかく、ファンが許さなかつた。

そんな彼がランナーをどうにか一塁へ送つた。やり慣れていないために当然バントは下手くそで、サード正面の強いゴロだった。見事なのは塁上のバルカンだ。打者のへっぴり腰を見るや、サインもカウントも無視して次の塁へ突っ走つていた。

俺は知つていた。勘のいいカラシニコフは、数こそ少ないがバントでの空振りやフライが一度もない。もしやあいつ、そのことを……。

「なに笑つてゐる。タイ・リー、次のバッターはおまえだ」

監督の声で俺はハツとした。誰もが試合に集中しすぎていた。次の打者はファールグラウンドの小さな円の中で控えていなければならぬのだが……。

俺はヘルメットをかぶり、バットスタンドから一本抜く。監督のレイバンが光つた。

「わかつてゐるだらうな、え？」

「へいへい」

俺はバットをかづぐと、口笛を吹きながら右打席へ向かつた。

白熱した投手戦でリードしているケースではときどきあることだ。ワンアウト一塁、打者はエース投手。手がしびれたり怪我したりすると次の投球に響くから、おまえは振るなというわけだ。態度の割には小せえジジイだぜ。いや、小せえからこそああしてんのか。どつちでもいいや。

俺は打席に入るや、レフトスタンドに向かつてバットを突き上げた。

どよめきと歓声が入り乱れたスタンド。

ベンチで控えるピンストライプの列が波打つ。

「正氣か？」「オーマイガッ！」「映画じゃねえんだぞ！」

巨石文明のような厳つい捕手がマスク越しに語りかけてきた。

「なんの真似だ」

「知らないのか？」

「そんなおかしな打法など知らんな」

「そうか……」

ベンチを出るときはなにも考えていなかつた。誇りを傷つけてやつたら、力んで四死球を出すかも、くらいのやつつけの策だつた。

巨石文明のひと言で、俺はひらめいた。

「古くから地球につたわる『最終奥義』さ」

「自信があるなら、はじめからそうすればいい」

「残念ながらこの打法は、一生に一度しか使っちゃいけないんだ」

「使うとどうなるのだ」

「一度と野球ができなくなる」

すかさず捕手はタイムをかけ、マウンドへ走つていつた。

怪物投手は力力と笑つた。

球速が五割増しになつた。革の焦げた臭いが打席に漂つてきた。銅像のようにレフトスタンドを指したまま、俺は三振した。

スタンドからはヤジと悲鳴の嵐。相手ベンチは爆笑の渦。

俺はかまうことなくベンチへ引き下がり、ヌンチャク打法の一一番、ジャッキー・ブルースに秘策を耳打ちした。

「俺を信じてくれ」

若者は立てたバットに向かつて小さくうなずいた。

ジャッキーは左打席に入るや、ライトスタンドに向かつてバットを突き上げた。

デビュー以来、本塁打ゼロの男がなにを血迷つたかと、俺の時にも増してスタンドは荒れた。宇宙勢ベンチは、笑い殺して試合放棄させる氣がと腹を抱えながら野次つた。

地球人は白旗の代わりに白木を上げたか……怪物投手はそんな顔をして振りかぶつた。

山なりのスローボールがきた。ジャッキーはそれを逃しはしなか

つた。

打球はセンター前にふわりと落ち、ホームへ帰ってきたバルカンは飛び上がつてガツッポーズ！

あの怪物は俺の秘策にまんまと引っかかってくれた。降伏の意を示した者にさらに恥をかかせようとする、悪い下士官のよつた性格か否かの大きな賭けだった。

次の打者は三振でスリーアウト。しかしついについに先制した。野球の恐人ダイナーどもを相手に、俺たち地球人は先制したんだ。

九回裏。不思議とフレッシャーは感じなかつた。メジャーで完全試合をやつたときのほうが震えたくらいだ。肩の調子は上々だつた。スタミナもまだある。相手は打ちあぐんでいる。そのまま虎を眠らせたまま終わらせる自信はあつた。

で……この有様はいつたいなんなんだ？

三人つづけてヒット。三球で無死満塁。

そうなのだ。とうとう奴らは俺の『クソ遅い速球』に目が慣れてきたのだ。

「ハアハア……」

マウンドの俺は頬をつたう汗をぬぐつた。

この回はまだ三つしか放つていないのに、急に疲れが襲つてきた。やばい……マジやばい。

打席に立つのは宇宙の四番。今日は十割打たれている。いい当たりを飛ばす奴は何人もいたが、今の三本をのぞけば、記録に残つたのはこの男だけだった。規格外打者のなかにあってこの男はさらに別格だ。

マスクをつけた黒騎士ブラックナイトが、がちゃがちゃとマウンドへやつてくる。男は仮面を外すとニーッと白い歯を見せた。

「敬遠するか？」

「ふざけんな！」

捕手はのろのろ帰つていった。

あとアウト三つ。三つなんだ。

スコアボードにあと一つ『〇』を加えることができなたら、俺は

ロジンバッグ

粉袋を手放し、キャッチャーミットを睨み、大きく振りかぶつた。

「今日で野球をやめてもいい！」

前足を上げ、軸足をふんばり、グラブをぐいと引いて、右腕を高く振った。

最高の感触だった。

サダハルだらうとアーロンだらうと、この一球ばかりは手も足も出るまい。

青い顔の男は腕の血管を浮き立たせ、むんとバットを振った。

「！」

次の瞬間、俺は天国を味わっていた。

KO負けしたボクサーが語る、あの感じだ。

気づくと俺はマウンドの上に大の字になっていた。

そうか……負けちまつたか……。夜空の満月も今日で見納め。にしても、ヤケによく自転^{まわ}る月だな。こつちに迫つてくるし……。その月にはなぜか縫い目があつた。

「うあつ！」

俺はとっさに右手をだして顔をかばつた。

握り慣れた丸いものが、そこに収まっていた。

なつかしい感じだ……誰のだらう、このボール。

「よこせ！ 早く！」

声がしたほうに顔を反らした。取ったボール以外はぼやけていてよくわらかない。

俺は内気な患者の「ぐく、言われるがままに球を放つた。

男はそれを素手で受け取るや、猛然とサードへ投じた。

背番号『6』……ああ、セカンドのカラシニコフか。

「ハツ！？」

俺はがばと上体をおこす。

サーードの男はすでに、一塁ベースでふんばるバルカンへ放つていた。

三塁につづき、飛びだした一塁ランナーもタッチアウト。
俺はボールを落とさなかつたからピッチャーライナーでアウト一
つで……えつと、えつと……。ふらつく頭で指折り数える。
すげえ！ トリプルプレーだ！

俺は再び大の字になつた。笑いがとまらない。

つたく、なんて野球バカだ。驚くところが間違つてるぜ。
俺たちは……勝つたんだ。

宇宙人たちは約束を守つた。ドーム上空にあつた華やかな光が少
しづつ減つていく。

MVPには当然、俺が選ばれた。

記者団に囲まれるなか、宰相らしき小柄な怪物は、トロフィーの
代わりに俺の肩を叩くとこう言つた。

「どんな望みでも一つだけかなえてやる」

囲みの外で泣きながら抱擁を交わす、バルカンとカララシーノ。

俺はそれを横目で見つめながら、青い老人に耳打ちした。

「……偉そうな男は黄色い目を丸くした。「ほんとうにそれでいい
のかね？」

俺はニッとうなずいた。

「人類はもつと謙虚にならないとな

地球はそれから数千年の間、静かなる監視のもと、戦争も破壊も
ない穏やかな時代がつづいたといふ。

宇宙リーグの野球殿堂には数多くの球聖が祀られている。なかで
も子供たちに人気なのは、地球を救い、そして追われた『小さな大
エース』だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0945g/>

アース・ウィンド&ファイアーズ

2010年10月8日15時20分発行